

【書評】松島剛史著 (2024)『ラグビーの世界をデザインする

ワールドラグビーの歴史とその仕事』晃洋書房

【Book Review】 Takeshi MATSUSHIMA (2024) Designing the Rugby World:

History and Work of World Rugby

大西 好宣 (ONISHI Yoshinobu) ¹

第一章：背景

(1) 担当授業「ラグビーを知る」

本書について述べる前に、まず評者の担当する授業「ラグビーを知る」(大西、2021)について触れることをお許し願いたい。評者にとっては、本書と当該授業との関連が深く、両者の関係について触れることなしに書評することが難しいためである。少し長くなるが、ご寛恕頂ければ幸いである。

2017年の春、評者は勤務先である千葉大学の教養課程向けの新たな授業として、ラグビーに関するものを密かに構想していた。アジアで初めてとなるラグビーW杯を二年後に控え、当時は今よりさらに知名度の低かったラグビーという英国生まれのスポーツを、何らかの形で若い学生たちに知らしめたい。そうした熱い思いが、カリ

キュラムに関する学内委員会での審議を経て授業として結実したのは、翌2018年の春のことであった。

授業名はわかりやすいよう「ラグビーを知る」と可能な限り単純にし、7.5コマ分、1単位の選択科目として、同年4月の第1タームから対面での授業を開始した。シラバスに記した授業の概要は以下の通りである。

国内におけるラグビーは野球やサッカー等 비해依然マイナーなスポーツの一つであり、その基本的なルールを含め歴史・文化的な背景についてもよく知られているとは言いがたい。そこで本授業では、人文社会科学的見地から同競技への多様なアプローチを試み、巨大な国際大会がアジアで初め

¹ 千葉大学

て日本で開催された（評者注：2018 年当時のシラバスでは「開催される」）ことの意義や背景、夏季五輪で7人制ラグビーが実施されることの意味などについて考える。

（出典：千葉大学普遍授業「ラグビーを知る」2024 年度シラバス）

（2）教科書を探し求めて

さて、困ったのは当該授業で用いる教科書である。国内において、ラグビーに関する学術的な書籍はそれほど多くない。学術的でないものを含めても、当時手に入るラグビー関連書籍の大半は、日本代表や人気大学チームに関するジャーナリスティックな内容か、有名選手や監督の伝記、或いは選手・指導者向けの具体的な戦術指南書、そして初心者向けのルール解説本などに留まっていた。

しかしながら、体育としてのラグビー授業ではなく、「人文社会科学的見地から」とシラバスでわざわざ断っている以上、それに相応しい教科書を探さねばならない。そしてようやく見つけたのが、李スノイル（2016）著『ラグビーをひもとく 反則でも笛を吹かない理由』（集英社新書）である。ラグビーに関して全てを網羅しているわけではないものの、ラグビーが他のスポーツと比べ何が違うかという特徴を、このタイトル自体が如実に示してくれている。

ただ実際には、当該書籍の内容や順番に沿って授業を進めるわけではないし、そもそも同書の内容だけでは7.5 コマ分の授業が成立しないため、結論としては教科書ではなくあくまで参考図書として指定するに留めた。

第二章：本書についての総論

前置きが長くなったが、本書『ラグビーの世界をデザインする ワールドラグビーの歴史とその仕事』を評者が初めて手に取ったのも、教科書探しという既述の文脈である。出版自体が2024 年と新しく、評者としては探し求めていたラグビーに関する学術的な書籍がようやく発刊されたと小躍りしたものである。

さらに評者を喜ばせたのは、著者・松島による冒頭の以下の断り書きに、人文社会科学という、評者と志を同じくするキーワードを見つけたことである。

では、欧米生まれのスポーツがどうしても世界中に知られ、広がっているのだろうか。1990 年代あたりから、そんな素朴な疑問を探究する試みがスポーツの人文・社会科学の領域ではじまった。

（出典：同書1 頁）

1990 年代から始まったという、そうした試みについて、松島は「今では目新しい」と断じるものの、評者の見るところ、それは関連する学界と、スポーツ強豪校と言われる一部の大学に限った話であろう。松島が教鞭を執る立命館大学も間違いなくそうした大学の一つなので、著者にとっては確かに目新しくはないのかもしれない。

けれども、それ以外の一般の大学において、スポーツを人文社会科学的な観点から論じる授業は、そう多くは成立していないだろう。現に、評者の勤務する千葉大学はそうした大学の一つであり、ラグビーだけでなく、どのようなスポーツについても、いわゆるスポーツ社会学的な授業は2018

年当時存在していなかった。

それだけに、本書のような内容の書籍が刊行されることは非常に価値がある。評者のような、スポーツ強豪校ではない一般大学勤務の教員が、或いはスポーツ社会学の泰斗ではない研究者が容易に手に取れるからである。この点について、まず著者・松島に対する心からの謝意を表明しておきたい。

第三章：本書の構成

さて、本書の章立てとその概略は以下の通りである。本書では章のタイトルにも、また本文にも「ワールドカップ」という表現が何度も登場するが、本稿では読みやすいよう「W 杯」と短縮表記する。但し、事実として下記のように章立てを説明する場合についてはこの限りでない。なお、各章の詳細な構成は、巻末資料 1 を参照されたい。

第 1 章「ワールドラグビーの誕生と構造」

（概略）英国で誕生したラグビー競技と、そのルール統一のために設立されたワールドラグビー（WR、旧 IRB）の 1970 年代頃まで発展の歴史を描く。

第 2 章「ワールドカップとラグビーの世界の統一」

（概略）第 1 章で描かれなかった、英国以外のラグビーの発展と、それに対する WR の関わり、ラグビーのグローバル化とその帰結としての世界大会、すなわち W 杯開催までの道のりを描く。

第 3 章「ラグビー憲章とゲームのグローバルな制御」

（概略）ラグビーがグローバル化した故に生じた問題を WR がどのように制御して

いったか。例えば、国・地域ごとに異なるプロ化への考え方やそれへの傾斜に焦点を当てて描く。

第 4 章「ゲームの均質化を補完する公認マッテオフィシャル制度」

（概略）ラグビーにおける試合のグローバルな品質を保つために、レフリーの養成或いはレフリング制度の普及発展が果たした役割について述べる。なお、この点について本章の最後に初めて日本協会への言及がある。

第 5 章「ラグビーワールドカップ 2019 とオリンピック・レガシー」

（概略）前章最後からの流れを受け、この章からは日本が中心となる。具体的には、日本におけるアジア初の 2019 年 W 杯を中心に、その準備段階から国内外で実際に起こったことを丁寧に掘り起こしていく。

第 6 章「ラグビーワールドカップ 2019 の有用性とレガシーの拡張」

（概略）前章と合わせ、2019 年の日本における W 杯がもたらした影響にはどのようなものがあるかを論じる。

第 7 章「ワールドカップを通じたネイションの形成とダイバーシティの推進」

（概略）本章も引き続き、2019 年の W 杯日本開催に関する話題を扱う。具体的には、日本代表チームの国際性・多国籍性の問題を通じて、WR の視点から見た「国」や「多様性」の定義及び概念について論じる。

第 8 章「ビデオ判定技術を通じたゲームと観戦経験の変化と制御」

（概略）Television Match Official (TMO) 導入の目的やその功罪など、現代における技術工学の発展がラグビー観戦のありようを今後どのように変えていくかといった問題を論じる。

つまり、全8章のうち、中間の第4章に世界及び日本の双方が描かれ、さらに海外のラグビー事情に関するものが前半の1～3章、日本のそれに関するものが後半の5～7章と実にバランスよく配分されており、日本人の読者としては理想的とさえ言える。加えて最終章となる第8章は、日本や世界といった地理的な問題ではなく、ビデオ判定技術の発展と試合への応用という、いわば現代のあらゆるスポーツに通ずる普遍のかつ未来的な事柄について、ラグビーの立場から取り上げている。この点については瞠目すべきであろう。

どの章も、著者がかつて専門書籍及び学術誌に発表した論考が元となっている。加えて著者は、英国トゥイッケナムにあるWorld Rugby Museumにまで実際に足を運ぶなど丹念な調査に努めており、そうした意味ではどの章も単独で成立し、いずれも読み応えと信頼性のある学術論文であると言えよう。当然ながら、評者の知らない事実も一杯で、例えば第1章で描かれたWR以外のラグビー組織が存在した歴史や、第5章で描かれた海外での2019年W杯の準備状況など、一人のラグビーファンとしてまた研究者として大いに啓蒙された。

さらに評者が驚いたのは、本稿冒頭で紹介した千葉大学での授業「ラグビーを知る」の週ごとの進め方と、本書の構成が極めて似通っていることである。因みに、評者が2024年度に担当した当該授業の週ごとの授業タイトルは以下である。

第1週「イントロダクション」

第2週「ラグビーの世界史」

第3週「ラグビーとワールドカップ、オリ

ンピック」

第4週「スポーツにおける研究とは何か、を考えるために」

第5週「ラグビーの日本史、日本代表と外国人問題」

第6週「ラグビーと大学」

第7週「7人制ラグビー、ワールドカップがもたらしたもの」

第8週「研究発表と評価」

似ていると指摘したのは、まずラグビーの世界史に触れてから、その次に日本史を語るという基本的な順番と、W杯やオリンピック、代表チームの外国人問題などといった個別の問題が取り上げられている点である。さらに言えば、本書と評者の授業の双方に共通する一種の弱みとして、女子ラグビーの取り扱いが少ないことが挙げられよう。もちろん、評者の授業では女子ラグビーについて短く紹介はするし、本書でも第2章で女子への訴求について簡単に触れられてはいるものの、一つの章を成すほどではない。いかんせん、女子ラグビーの歴史はまだ浅く、本書の著者も評者も共に男性である。したがって、ここで挙げた両者の類似性は決して偶然などではなく、当然の帰結のようにも思われる。

第四章：教科書としての適格性

では最後に改めて、評者の担当するラグビー入門者のための授業「ラグビーを知る」の教科書として、果たして本書がどの程度適当かについて考えてみたい。まず、本書を教科書として指定することについて、これまで論じて来たことを踏まえば、それを前向きに評価すべき主な理由は以下の三つであろう。

肯定的理由 1

本書の内容は人文社会学的見地からラグビーを論じるというもので、評者の授業コンセプトと全く一致している

肯定的理由 2

本書の構成及び問題意識と、授業の進め方や各回の論点がある程度符合している

肯定的理由 3

本書の内容は学術的価値と信頼性が高い

他方、本書を教科書として指定することに躊躇する理由は、おそらく下記の二点であろう。

否定的理由 1

本書はその読者として、ラグビーというスポーツの成り立ちや性格をある程度理解している者を想定している（すなわち、決して初学者向けの書籍ではない）

否定的理由 2

誤字・脱字及びその他表記の誤りが看過出来ないほど多く、通読しにくい（巻末資料 2 を参照）

このうち、特に誤字・脱字のような基本的瑕疵は、教科書としての正当性を大きく棄損するものであろう。最終的には著者にその責任があるとは理解するものの、これだけの数が見逃され放置されたまま学術書籍として出版されたことは、出版社及び校正・編集者の責も免れないであろう。今後、版を重ねることがあれば是非改善してほしい。

大西好宣（2021）「大学生が考える日本ラグビーの振興策：W 杯日本大会開催前後の比較を通して」『ラグビーフォーラム』Vol.14., pp.41－47., 日本ラグビー学会

引用文献

第 1 章 ワールドラグビーの誕生と構造

ラグビーの誕生とその固定性と可変性/ ラグビーの広がりと組織化、いくつかの国際組織/ アマチュアイズムの堅守は何をもたらしたか/ ワールドラグビーの創設/ ワールドラグビーの構造と機能、パワー/ 1970 年代までのワールドラグビーの発展とその「国際性」

第 2 章 ワールドカップとラグビーの世界の統一

ラグビー振興のための財政支援と商業化/ ワールドラグビーの世界戦略の始動/ ワールドカップを迫る内外の圧力/ ワールドカップの内在的意義/ アマチュアリズムの限界と世界のラグビー組織のニーズ/ ワールドカップ製品の「正統性」管理とグローバルな統治機関への成長/ 20 世紀末の組織改革/ 女性の包摂とワールドカップ製品の多様化

第 3 章 ラグビー憲章とゲームのグローバルな制御

オープンプロ化時代における理事会のビジョン/ 「見る」スポーツへの適応と観客・視聴者の視点/ ラグビーリーグからの差異化と吸収/ スペクタクル化するラグビーの内的抑制—スーパー12 への批判とその「共有」—/ ラグビー憲章—グローバルなゲームの均質化と制御の技法—/ スーパー12 に見る異端なスキルの排除と均質性の保持

第 4 章 ゲームの均質化を補完する公認マッチオフィシャル制度

ゲームを支える主体の形成/ ゲームの成立—マッチオフィシャルと選手の相互作用—/ 公認レフリー制度の誕生とゲームの正常性/ ワールドカップの高度化とワールドラグビーの開発戦略/ 新興国への開発支援とレフリング施策の節合/ 日本への影響—日本ラグビー協会の立場とレフリーの身体—

第 5 章 ラグビーワールドカップ 2019 とオリンピック・レガシー

オリンピック・レガシーとラグビーワールドカップ/ ラグビーにおけるレガシー論の受容/ オリンピック運動とワールドラグビー/ ラグビーワールドカップ 2019 の意義—ワールドラグビーと日本ラグビー協会—/ ラグビーワールドカップ 2019 レガシー計画とその成果

第 6 章 ラグビーワールドカップ 2019 の有用性とレガシーの拡張

レガシー計画の方法と戦略—政官民パートナーシップと外部資源の活用—/ ワールドカップの公益性と資金調達—組織委員会の収支構造と大会保証料—/ 国

と地方自治体の支援と協力/ レガシーの拡張とその動カーステイクホルダーと
目的合理性-/ ワールドカップとレガシー研究の課題

第7章 ワールドカップを通じたネイションの形成とダイバーシティの推進

多国籍・多民族的なジャパンとダイバーシティ/ 日本におけるラグビー文化の
承認とネイションのあり方をめぐる闘争/ 日本的スポーツ文化の特徴と国籍制
度の相互作用/ ナショナルな代表資格規定をめぐる二つの基準—ラグビーとオ
リンピック—/ ナショナルな代表資格規定とラグビーの価値創出—インテグリ
ティとは?—/ ラグビーワールドカップからオリンピック・パラリンピックへ

第8章 ビデオ判定技術を通じたゲームと観戦経験の変化と制御

TMO の導入とレフリーへの支援/ 人間では見られない「現実」の可視化—ハイ
パーリアルな判定—/ レフリーの従属化や依存化と対策/ スペクタクルとして
の TMO 判定/ 現実とハイパーリアルを楽しむ観戦体験/ 用意された体験の消
費

補 論 ラグビーという共通世界の生成と変化を理解する

スポーツのグローバル化とそれを問う意義/ スポーツとは何か—スポーツの内
部と外部の相互作用—/ スポーツ内部のダイナミズム/ スポーツは存在しない
—多様な諸活動の集合あるいはアイデンティティー—/ 現代スポーツの構造—政
治、経済、市民社会のアーリーナー/ スポーツと市民社会、公共性をめぐる留意点/
スポーツの公共性をめぐるアプローチとその課題

巻末資料 2

頁	行	誤	正
2	後から 3	関わりなら	関わりながら
6	後から 6	いずれせによ	いずれにせよ
8	12-13	としての生き残る	として生き残る
18	後から 2	ゲーム関する	ゲームに関する
20	後から 4	大切し	大切にし
21	4	象徴されるようアマチュア	象徴されるようなアマチュア
45	後から 8	豊かなでない	豊かでない
49	5	組織あいだで	組織のあいだで
72	7	気にしたりながら	気にしたりしながら
104	9-10	目的にための	目的のための
145	後から 6	規定の一部変更し	規定を一部変更し or
			規定の一部を変更し
159	後から 5	チーム肩入れする	チームに肩入れする
159	後から 1	1890 年代はいると	1890 年代にはいると
180	後から 1	ドッチボール	ドッジボール
参考文献	3	AISA	ASIA